

中国文化の中に於ける桃李と、跡見花蹊

嶋田英誠

要旨

日本における女性教育家の草分けであり、今日の跡見学園の学祖となった跡見花蹊（一八四〇―一九二六）は、その本名を瀧野というが、従来もっぱらその花蹊の号によって知られている。跡見瀧野が花蹊と号したのは、「桃李言わざれども、下自ずから蹊を成す」という中国の古いことわざに基づく。しかし、中国における先秦時代から唐宋に至る間の桃李の語の持つ象徴機能をつぶさに検討すると、教育者としての跡見瀧野が花蹊と号するに当っては、もうひとつ狄仁傑（六三〇―七〇〇）にかかわる故事を見逃し得ない。すなわち狄仁傑が国家に有用の士を推薦した故事から始まって、唐代以降には桃李の語は門人の中から国家に推薦した有為の人材を意味するからである。ここから考えれば、幕末明治の混乱期にあって、跡見花蹊は国家に有用な女性の人材の育成を志したものと推測されるが、この推測が正しければ、当時においてには真に画期的な女子教育の目標を掲げたものである。

日本における女性教育家の草分けであり、幕末から明治にかけて活躍し、今日の学校法人跡見学園の学祖となった跡見花蹊（一八四〇—一九二六）は、その本名を瀧野（たきの）というが、従来もっぱらその花蹊の号によって知られている。跡見瀧野が花蹊と号したのは、

桃李不言、下自成蹊。

桃李言（とうりものい）わざれども、下（したおの）自（し）成（な）蹊（けい）を成す

（以下、特に断らない限り、漢文の句読点・読下し・現代語訳・括弧内等、筆者。なお、仮名遣いは現代仮名遣いに従う）

という中国の古いことわざに基づく⁽¹⁾。その諺の大意は、

桃（もも）や李（すもも）は、（口がきけないから、ことさらに）ものを言いたて（て自分から人を招き呼ぶことはし）ないけれども、（人々は誰でも皆その花は美しくその実はおいしいことを知っている）、その木の（下）には（人が集まり、地面には）自然に小道ができる

である。

ところで跡見学園女子大学新座キャンパスの一隅にある木造建築不言亭（ふげんてい）は、大正八年（一九一九）に跡見瀧野自身の設計によりその晩年の書

院として建築したものを、昭和四十八年（一九七三）に新座キャンパスに移築したものであるが、その室号を不言亭というのも、同じくこの諺の「言わず（不言）」の部分に基づく⁽²⁾。「花蹊」といい「不言」といい、当時の女性としては珍しかった、跡見瀧野の漢学にかかわる素養の深さを思わせる命名である。こうしてみると、跡見学園女子大学短期大学部（旧跡見学園短期大学）の同窓会がみずから「桃李の会」を名のっているのは、まことに由緒正しいことである。

今日の跡見学園女子大学は、平成十四年四月、新座キャンパスに新校舎として三号館・四号館・花蹊メモリアルホールを新築し、あわせて正門とその内側のロータリー周辺を整備した。これに伴い、第三十三回卒業生（平成十三年三月卒業）諸君の御厚志により、卒業記念としてモモの木とスモモの木などの寄贈を受け、これらを正面のロータリー内に植樹した⁽³⁾。これらのモモとスモモは、あい対して建つ花蹊メモリアルホールとともに大学の入口にあって、跡見花蹊が教育にかけた篤き思いを追慕するよすがとするべきものである。

この一文は、この機会に、「花蹊」「桃李」「不言」など跡見花蹊が生涯にわたり親しんだキーワードについて、日本における女子教育の先駆者がそこに託した思いを、中国文化の側面から今一度確認しておこうとするものである。

二

さて、花蹊とは「花の蹊（こみち）」の意である。しかし中国では元来「こみ

ち」の意には「徑^{こみち}」の字を以てすることが一般的である。「花のこみち」の意にも、「花徑^{かけい}」という熟語がしばしば用いられたのに対して、「花蹊」の語はほとんど用いられていない⁽⁴⁾。また「徑^{けい}」と「蹊^{けい}」はたまたま日本語では同音であるが、中国語では歴代の音は異なり、「花徑⁽⁵⁾」と「花蹊」は諧音による通用ではない。このことからしても、跡見瀧野の花蹊という号は、単に「花のさくこみち」の意味でつけられたものではなく、冒頭に記した諺に基づいた、別途の意図が附加されていたとしなければならぬ⁽⁶⁾。では跡見花蹊は、何故にこの諺に拠ったのであろうか。まず、その出典に当たることからはじめよう。

むかし、中国の前漢（前二〇六―前八）の時代、李広（？―前一一九）という将軍がいた。代々弓術を受け継ぐ武門の家に生れ、文帝の十四年（前一六六）に初めて対匈奴戦争に従軍して以来、呉楚七国の乱（前一二四）の平定と、北方の辺境守備における匈奴討伐に名を馳せた。武帝の元狩四年（前一一九）、大將軍の衛青（？―前一一〇六）と驃騎將軍の霍去病（前一一〇―前一一七）が大軍を率いて匈奴を撃ったとき、配下の前將軍として二年ぶりに参戦したが、道に迷って遅れたために本体と合流できなかつたことの軍事上の責任を問われ、陣中に自刎して果てた。享年六十余であつた。

このようなことが今日知られているのは、それからやや経って歴史家である太史公^{しはせん}司馬遷（前一四五頃―前八六頃）が、その著『史記』の中に一卷を立てて李広の列伝に当てたからである。その伝を読んでみると、李広は勇敢かつ知略に優れ、匈奴からは「漢の飛將軍」と恐れられた名

將ではあるが、必ずしも軍功^{ぐんこう}赫々たる大將軍というわけではない。衛青の配下として出撃したにもかかわらず功を立てられなかつたこと（前一二三）や、自軍がほとんど全滅して張騫^{ちやうけん}（？―前一一四）の軍に救われたこと（前一二二）、あるいは敗残のうえ匈奴に生捕られてすんでのところで虎口を脱したこと（前一二九）すらある。あるいは、従弟の李蔡が宰相の地位にまで昇りつめたのに対して、李広の地位は一向に上がらなかつたことをあげつらわれてもいる。

そのような李広を列伝の一に取り上げた理由を、司馬遷は自ら「太史公自序」において、「敵に当たるに勇にして、士卒を仁愛す。号令は煩ならず、使徒^{むか}之に郷う。（だから）李將軍列伝第四十九を作る」と記す。すなわち司馬遷が李広の伝を取り上げて記録したのは、極論すれば、その軍功の故ではなくその人となりの故である。伝の中においても司馬遷は、「李）広 廉にして、賞賜を得れば輒^{すなわ}ち其の麾下^{きか}に分かつ。飲食は士と之を共にす」「広の兵に將たるや、乏絶の処、水を見れば士卒尽く飲まざれば、広 水に近づかず。士卒 尽く食わざれば、広嘗^{しばしば}食せず」「広 訥口にして、言 少なし」などと叙述し、李広が自ら命を絶つたとき「広の軍士大夫、一軍皆な哭す。百姓^{ひやくせい}之を聞き、知ると知らざると、老壯無く、皆な為^{なみだ}に涕を垂^{なみだ}」れたと記す。そのような李広の人となりを総括し、評価して、司馬遷は李將軍伝の末尾に附した「太史公曰く」の部分に次のように記す。

伝に曰く、「其の身正しければ、令^{れい}せずして行わる。其の身正しか

らざれば、令すと雖も従われず」と。其れ李將軍の謂なり。余李將軍を睹るに、悛悛たること鄙人の如く、口は道辞する能わず。死するの日に及び、天下の知ると知らざると、皆な為に哀しみを尽くす。彼れ其の忠実の心、誠に士大夫に信ぜらるるなり。諺に曰く、「桃李言わざれども下自ずから蹊を成す」と。此の言、小なりと雖も、以て大に諭すべきなり。

文中「其の身正しければ、云々」の引用句は、孔子（姓名は孔丘、字は仲尼。前五五―前四七九）の言として『論語』子路篇に見える。したがってこの文の大意は、

孔子が言うのに、「為政者が自ら行いを正しくすれば、ことさらに命令しなくても、その意図するところは自然に民人の中で実現していくものだが、自らの行いが正しくないと、いくら上から命令しても、民人は従わない」とある。これは李広將軍のような人のことを言っているのだろう。私自身が李広將軍に会って観察したところでは、人柄は誠実で、寡黙であることまるで田舎者のようであって、まことに口下手であった。それにもかかわらず、その死にあたっては、天下の人々はみな、李広將軍と交遊のある者も無い者も、心の底からその死を悲しんだ。彼のその誠実な心根が、士大夫たちからそれほどにも信頼されていたのである。「桃李言わざれども、下自ずから蹊を成す」という諺がある。この諺自体は、（果樹の花とか実とか）小さな内

容について言っているに過ぎないが、以て（李広將軍の事蹟のような）大きなことがらの喩えとして用いてよい。

である。ここに、初めて「桃李言わざれども、下自ずから蹊を成す」という諺が文献に記録されたわけである。⁽⁷⁾ 司馬遷がこのことわざを引いた意図を推測してみよう。司馬遷が李広の人徳を賞賛するのは、その内容において人柄の誠実さであり、その外への現れの上では訥弁さであつたと解釈し得る。すなわち、十分に高い評価に値する内容を持ちながら、寡黙訥弁にしてそれを外に對して語らない態度について、「桃李言わざれども、云々」の諺を引きながら、桃や李に喩えて賞賛しているわけである。⁽⁸⁾

それでは、喩えとして引かれた桃李の徳とは何であろうか。その外への現れの上では「不言」すなわち寡黙であることが明らかであるが、その内容にかかわる長所とは何であったのか、諺そのものには触れるところがない。しかし冒頭に記したこの諺の拙訳において、筆者はその部分を「その花は美しくその実はおいしいこと」とした。それは唐の司馬貞が『史記素隠』に、次のように記しているのに基づいたからである。

姚氏を按ずるに云う、桃李本と云う能わず、但し華実を以て物に感ぜしむ、故に人期せずして往き、其の下自ずから蹊徑を成すなり、と。以て、広の道辞する能わずと雖も、能く感ぜしむる所有るに喩つ。その忠心は信物なる故なり。⁽⁹⁾

しかし跡見瀧野は、桃李の優れたところを、その実ではなくその花にあると考えたからこそ、「花蹊」と号したものであろう。そもそもこの諺において、取り上げられた樹木はなぜ桃李であるのか、その桃李の徳とはその花にあるのか実にあるのか、跡見瀧野はなぜ花にあると考えたのか等々、問題をやや広げた上で、しばらく考察を進める。続く章では、中国文化の最古層を示す典籍『詩経』『礼記』『春秋』などから始め、古今の文献や絵画作品等に見られる桃李について、見渡すこととする。

三

今日の知識によれば、モモとスモモはともに古くから東アジアで広く栽培されてきた果樹である。すなわちモモ *Prunus persica* は、中国原産のバラ科サクラ属の落葉小高木、中国名は桃^{タウ}。スモモ *Prunus salicina* は、これも中国原産のバラ科サクラ属の落葉高木、中国名は李^リ。さて、各種の園芸書等によれば、スモモは古今あるいは日中により大差はない。しかしモモのほうはどうかといえ、今日の我々が食っている果物としてのモモは、一九世紀の中頃に中国から入ってきた上海水蜜桃や天津水蜜桃をもとに日本で品種改良したものであって、それ以前の日本のモモはもっと実が小さかったという。中国のモモについては、『中国果樹志 桃巻』（中国林業出版社、二〇〇一）・『中国名花叢書 桃花』（上海科学技术出版社、二〇〇〇）・『中国高等植物図鑑』（科学出版社、一九七二）・洪光住監修・田中静一編著『中国食物事典』（柴田書店、一九

九二）等によってしか知らないが、それはやはり我々が夏に食う果物としてのモモとは大分イメージが異なる。というのは、中国の桃類には桃（普通桃）*P. persica* のほかに山桃 *P. davidiana*、甘肅桃 *P. kansuensis* などの近隣種があり、古くは桃の語の内包に含まれていたらしいのが第一。『爾雅』積木に、「旄、冬桃なり（注に「子は冬に熟す」と。旄、山桃なり（疏に「山中に生ずる者は、旄桃と名づく」と）」とあるが、旄は *P. persica* で、今日まで栽培されている品種の一である冬桃の系統であり、旄桃は *P. davidiana* であるという。第二に、桃 *P. persica* の原型と、今日の食用あるいは観賞用の品種としてのモモとの隔たりである。桃の野性種（毛桃）は、今日でも陝西・甘肅一帯の海拔二二〇〇メートルくらいの高原に分布しており、その果実は美味とはいいが、直径五―七センチとスモモよりやや大きい程度でしかない。第三は、その改良種の問題である。桃は早く殷（前一六〇〇頃―前一〇五〇頃）時代から栽培され、品種改良が行われていたらしく、前漢の事物について記す『西京雜記』によれば、都の長安の近郊にあった大規模な園林、上林苑には「秦桃・旄桃・細核桃^{しょうかくちう}・金城桃・綺葉桃・紫文桃・霜桃」の七つ品種の桃が植えられていた。降って韓愈（七六八―八二四）が「百葉（八重咲き）の双桃、晩に更に紅なり」（題百葉桃花）と詠い、あるいは王仁裕（八八〇―九五六）の著という『開元天宝遺事』に、玄宗（在位七二一―七五六）の時「御苑に新たに千葉（八重咲き）の桃花有り、帝親^みずから一枝を折りて妃子（楊貴妃）の宝冠の上に挿す」（助嬌花）とあるものは、明らかに花を観賞に供するための八重咲き品種である。この品種は碧桃^{へきとう}

と呼ばれ、南宋以降には盛んに絵画作品に画かれ(例として「白桃小禽図」(团扇軸装(日本/個人蔵) 図一)⁽¹⁰⁾)、のちにはそれ自体に多くの品種ができた。このような品種改良の過程で、食用・観賞用双方においてさまざまなタイプの桃が生み出されたらしい。従ってこれから検討しようとする文献に記され、あるいは絵画に画かれた桃については、その一一について個別に品種を比定することは困難であることが多い。

さて、この桃と李は、『詩経』の中にすでに桃李と組み合わせられた熟語として登場する。例えば、国風・召南「何彼穠矣」の詩に、唐棣と呼ばれる木の花について「何ぞ彼の穠(美しく盛ん)たる、華は桃李の如し」とあるから、古くから桃李はともに美しい花を盛んにさかせる樹木の代表格であった。のちに唐の詩人皮日休(九世紀中葉)は、桃の花を「艶中の艶、花中の花」と称えた(「桃花賦」)が、その淵源はかく古い。また、『礼記』月令の仲春の月(旧暦の二月)に、「始めて雨水あり。桃始めて華さき、倉皇(コウライウグイス)鳴く」とあり、『大戴礼』夏小正にも「梅杏桃李、則ち華さく」とあるなど、桃の花は農事暦上重要な春を告げる花であった。のちのち、桃(あるいは桃李)を春の風物の代表として詠う文学作品には枚挙に暇がない。あたかも日本において春の提喻が桜の花である如くに、中国では春の花といえば桃(あるいは桃李)であった。ほんの一例を上げれば、余りにも有名な作品であるが、李白(七〇一―七六二)の「桃花流水杳然として(奥深く遙かに)去る。別に天地の人間に非ざる有り」の句(「山中問答」)、張志和(九世紀後半)の「西塞山(浙江省呉興磁湖鎮にある道山磯)前 白露飛び、桃花流水

鱖魚肥ゆ。青き箬笠(竹の皮で作ったかさ)、緑の蓑衣(すげで作ったみの)、斜風細雨 帰るを須いず」の詞(「漁父」)などは、自然の中の春景色を桃の花を取り上げて詠う。

絵画作品の上でも、桃の花は文学作品と同様に、春の季節の代表的な花卉としてしばしば画かれている。たとえば、北宋の第八代皇帝徽宗(在位一一一〇―一一二五)の筆と伝える「桃鳩図」軸(一一〇七、日本/個人蔵。図二)⁽¹³⁾は、花を付けた桃の枝に止まる鳩を画く。美しい花と珍しい鳥を画くという花鳥画の伝統的な枠組みの中にありながら、造形における時代精神であった自然主義の、最善の成果の一である。南宋第四代皇帝寧宗(在位一一九四―一二二四)の皇后であった楊氏(一一六二―一二三二、一二〇二皇后冊立)の賛が付された「桃花図」冊頁(台北/国立故宫博物院蔵。図三)⁽¹⁴⁾は、作者は不明であるが、南宋時代の折枝花卉画の代表作の一である。対象の細部まで観察し、近接描写することを通じて、その生きとし生けるようすを丁寧に画き出す。元・明になると、花や鳥は再び自然や庭園のような外なる環境の中に組み込まれて画かれるようになるが、桃の花はほとんど春景の記号と化しており、花鳥画のみならず人物画においても、春景色であれば必ずと言ってよいほど花さく桃の樹が画き添えられた(例えば、十六世紀、明の宮廷画家・呂紀による「四季山水図」四軸(東京国立博物館蔵)の春景。図四)⁽¹⁵⁾。ただし、このように通観してみると明らかのように、桃に対して李はほとんど画かれていないほか、文学作品では桃李と並び称せられているにもかかわらず、絵画作品では桃李を並び画いた例を知らない(何らかの故事、例えば後に

触れる李白「春夜宴桃李園序」を画く作品等は除く。純白なること雪のごときさまを愛せられた李花であるが、なぜか杏や梨の花ほどにも画かれることは少なかった。

ところで盛者必衰は世のことわり、春の爛漫を謳歌する桃李は、その一方で、たちまちにして散り衰えゆくものとしてとらえられてもいた。阮籍（二一〇―二六三）は、「嘉き樹 下 蹊を成すは、東園の桃李。秋風の飛糞を吹けば、零落 此より始まる。繁華に憔悴有りて、堂上に荆杞を生ず」、「熒熒たる（小さいけれどもきらきらとした）桃李の花、蹊を成しては將に天傷（わか死に）せんとす」（「詠懷」）などと詠う。李白はまた、移ろいやすい桃李の花よりも松柏の常緑の姿をしばしば称えており、例を上げれば「開花すれば必ず早落す、桃李は松に如かず」（「箜篌謡」）、「願わくは君 長松に学べ。慎みて桃李と作ること勿れ」（「贈韋侍御黃裳」）と。杜甫（七一二―七七〇）にも、「顛狂の柳絮風に随いて舞い、輕薄の桃花水を逐いて流る」（「絶句満興」其五）と詠う例がある。しかしこのように哀惜され、ときには忌まれるのも、畢竟その花の美しさの故である。一方で松柏の堅貞を称えた李白も、あるとき従弟たちと桃李のさき誇る園に宴会するに当って、「夫れ天地は万物の逆旅（はたご）、光陰は百代の過客」なのだから、「夢の如」き「浮生」の一時の歡樂に身を委ねるのだといい、桃李の花を前にして「瓊筵（美しいござ）を開いて以て花に坐し、羽觴（雀の羽を象った杯）を飛ばして月に酔」ったのである（「春夜宴桃李園序」）。李賀（七九一―八一七）が、「況んや是れ青春日は將に暮れんとし、桃花乱れ落つること紅雨の如し。君に勸む 終

日酩酊して酔え、酒は到らず 劉伶（三世紀後半）⁽¹⁶⁾ 墳上の土」（「將進酒」）と詠うのも、桃李の花の刹那の美しさを愛でてのことである。

しかし、言うまでもなく桃李は、その花を觀賞したのみならず、その実を果実として食った。『詩経』 国風・魏風の「園有桃」には、「園に桃有れば、其の実を之れ殺う」とある。また『礼記』内則には、ご馳走として食うべき植物類として芝・栢・蕨・棗・栗・梅・杏・楂・梨・薑・桂を挙げているが、そのうち「桃・李・杏・栗・棗」は古来五果と呼ばれた代表的な果実であった。しかしこれらの中でも、桃と李は特別に美味なものであったようだ。すなわち、春秋時代（前七七〇―前四五三）、名宰相の誉れの高い公孫僑（子産、？―前五二二）が治めていた鄭の国では、善政が行き届いたので人々は皆衣食ともども満ち足りており、その結果「桃李の（実がたわわにみもつてその枝が）行に垂るる者、之を援く（よじのぼってその実を採ろうとする）もの莫きなり」（『呂氏春秋』卷十、下賢）という逸話が伝えられている。また同じころ齊の景公（在位前五四八―前四九〇）は、君臣の義をわきまえない三人の勇士に対して二つの桃を与えてこれを争わせ、もってこの三人を死に至らしめたことがある（『晏子春秋』諫下二）。また李については、別に「瓜田に履を納れず、李下に冠を整さず」というきわめて有名な諺があり、「君子は未然に防ぎ、嫌疑の間に処ら」ざる意である（古楽府「君子行」）。これらいくつかの事例からは、桃と李は当時垂涎の果物であったことが知られるわけである。

有名な話だが、かつて孔子は、桃の実の食い方を知らなかったため、

魯の哀公（在位前四九五―前四六八）に満座の面前で笑い物にされたことがある。すなわち『韓非子』外儲説左下に、「孔子、魯の哀公に御坐す。哀公之に桃と黍とを賜う。哀公用いんを請うに仲尼先ず黍を飯いて後に桃を啗う。左右皆な口を揜いて笑う。哀公曰く、黍は之を飯うべきに非ず、以て桃を雪う（炊いた黍で桃の表面の細かい毛を拭い取る）、と」とある。『礼記』内則には、桃の実を食べるように調え扱ふことを「胆す」というとあり、孔穎達（五七四―六四八）の疏に、一説に、桃は毛が多いので、これを拭い去って、色は青く滑らかなること胆のごとくする意味だとする。⁽¹⁹⁾昔の桃の実は、かなり毛深く、舌触りが悪かったものようだ。

ところで、桃や李の実の変った用い方として、古い中国の歌垣においてこれらが呪物として男女の間で投げ交わされていたことが知られている。⁽²⁰⁾すなわち『詩経』大雅・蕩之什の「抑」に「我に投ずるに桃を以てし、之に報ゆるに李を以てす」とあり、国風・衛風の「木瓜」には「我に投ずるに木瓜を以てす、…、我に投ずるに木桃を以てす、…、我に投ずるに木李を以てす、…」とある。⁽²¹⁾このような用い方があったとすれば、当時の桃の実は今日のモモより堅く小さかったであろう。六朝時代に成立した『漢武帝内伝』には、前漢の武帝（在位前一四〇―前八七）が女仙西王母の訪問を受けたという有名な伝説を載せる。それによれば、その時西王母は武帝に桃の実を供したという。すなわち、西王母は「また侍女に命じて更に桃果を索めしむ。須臾にして玉盤を以て僊桃七顆を盛る。大なること鴨卵の如く、形は円く青色なり。以て王母に呈す。母、

四顆を以て帝に与え、三顆は自ら食う。桃味は甘美、口に盈味有り。帝食い、輒ち其の核（たね）を収む。王母帝に問う。帝曰く、之を種えんと欲す、と。母曰く、此の桃は三千年に一たび実を生ず。中夏は地薄くして之を種うるも生ぜず、と。帝乃ち止む」とある。西王母が武帝に食わせた、三千年に一度しか実を結ばない垂涎の桃の実は、その大きさがアヒルの卵ほどであったというのだから、当時の現実の桃の実はそれよりももっと小さかったであろう。

前掲した各種の園芸書等によれば、中国では今日でも桃のさまざまな品種が栽培されている。例えば、山東省益都の名産である青州蜜桃は、実の重さは六〇グラムと小さいが、果肉は緑白色というから、桃を調べて「色は青く滑らかなること胆のごとくする」のだという孔穎達の言は、なるほどこのようなモモについて言うものかと思われるほか、華北で栽培されている冬桃は、実の重さは一〇〇グラム、細毛が多く皮が剥きにくいというから、かの孔子がてこずったのはこのようなモモかとも思われるし、またこの冬桃は肉質が硬くて水分が極めて少ないというから、スモモやボケの実とともに投げ合うこともできるかもしれない。なおこの冬桃は十二月中旬に収穫して二月三月まで保つから冬桃というのであり、わけからおくてまで、これもさまざまな品種がある。

昔の桃の実の大きさを知らうとするなら、文学作品より絵画作品に徴した方が知りやすいように思われよう。ここでは、南宋（一一二七―一二七九）の院体（宮廷絵画様式）に基づく「桃図」軸（日本／個人蔵。図五）⁽²²⁾を紹介するが、残念ながらその実の大きさを推定するには比較対

象とすべきモチーフが足りない。しかし歴代の絵画作品に画かれた桃の実には、確かにそれほど小さくはないと思われるものがある。例えば宋末元初（一二世紀後半）の画家である顔輝の画いた蝦蟇仙人（図六）⁽²³⁾は、その左手に花と実のついた桃の枝を持っているが、その実の大きさは仙人の手のひらほどあり、今日のモモと比べて遜色がない。明代に画かれた仙人像にもしばしば桃の実を持つ姿に作られるものがあり（例として趙麒の「蝦蟇仙人図」軸（東京／根津美術館蔵）。図七）⁽²⁴⁾、その場合も、桃の実は手のひら一杯に乗る程の大きさに画かれる。これらの絵画作品にのっとる限り、元明の頃までには桃の実は今日の桃ほどの大きさにまで品種改良されていたものと考ええる余地がある。『中国食物事典』によれば、山東省肥城を主産地とする肥城桃（一名は肥桃・大桃）は、実の重さが二〇〇乃至二五〇グラムあり、大きいものは六五〇グラムに達するというから、ほぼ日本の我々が今日食っているモモと同大だが、千年の栽培の歴史があるのだという説を紹介している。

上記の西王母と武帝にかかわる伝説からもうかがわれるように、六朝時代以降になると桃が仙人の食物であって不老不死をもたらす仙薬であると、道教の中で信じられるようになっていた。たとえば賈思勰（六世紀）の『齊民要術』巻十「桃」の条に引く『神農經』には、「玉桃、之を服すれば長生して死せず。若し早く之を服することを得ざれば、死に臨む日に之を服すれば、其の尸は天地畢るも朽ちず」とある。爾来、道教関係書に桃の実を大きく誇張することをしばしば見る。ここに画かれる蝦蟇仙人が手に桃を持つのも、蝦蟇仙人の不老不死性を象徴するモ

ティーフとして画き添えられているものであり、花と実とが共に画かれる観念性・非現実性も、そのような象徴機能によって説明し得る。そうだとすれば、上記の絵画作品に画かれた大きな桃の実は、靈験あらたかな仙薬として誇張表現された、文字通りの絵空事である可能性もある。

文学作品の中では、明初の劉崧（二三一一—三八一）に「四斤桃子歌」（『槎翁詩集』巻四）がある。冒頭に「四斤の桃の子、世の珍とする所、雕盤にて客に献ずるに輪困（丸いこと）を誇る」と詠う。斤は重さの単位で明代には約六百グラムに当たるから、四斤は約二・四キログラム、経験則からいえばこれは桃の実としては余りにも大きい。詩的誇張が含まれているのであろうが、しかし誇張の程度は知りえない。

ところで、この「四斤桃子歌」は、「種え成して三年 玉枝蒼し、開花結実して君始めて知る」とも詠っていて、日本で言う「桃栗三年、柿八年」の諺とよく符合する。中国においても桃は三年にして実る果樹として古くから認識されており、白居易（七七—一八四六）は「桃を食い其の核（たね）を種う。一年にして核 芽を生じ、二年にして枝葉を長じ、三年にして桃に花有り」（『種桃歌』）と詠う。諺としては、陸佃（一〇四二—一一〇二）の『埤雅』に、「諺に曰く、『白頭にても桃を種う』と。又た曰く、『桃三季四、梅子十二』と。言う、桃は生れて三歳にして便ち華果を放つ、梅李より早し。故に首白しと雖も、其の華子の利、待つべし」と記録されている。畢竟、桃の花はそれほど美しく、桃の実はそれほどに美味な果実であったということであろう。⁽²⁵⁾

四

花と実で利をもたらす桃は、他面、その旺盛な成長力と繁殖力が注目されていた。その反映が、『詩経』国風・周南の「桃夭」に見られる。

桃の夭夭たる、灼灼たり其の花、

之の子 于に帰ぐ、其の室家に宜しからん。

桃の夭夭たる、萋萋たり其の実

之の子 于に帰ぐ、其の家室に宜しからん。

桃の夭夭たる、其の葉萋萋たり、

之の子 于に帰ぐ、其の家人に宜しからん。

ここには、しなやかで若々しい(夭夭)桃の、輝かしい(灼灼)ばかりの花、大きく丸い(萋)実、さかんに茂った(萋萋)葉と、春から夏、秋にかけての桃の盛んな様子が詠みこまれている。しかしこの詩は、じつは、これから結婚しようとする若い女性の美しさをたたえ、嫁ぎ先における幸福と子孫繁栄を祈った歌、すなわち結婚の言祝ぎ歌である。このような祈りを桃に託したのは、一つには桃の花の美しく大きくさまを若い娘の容姿になぞらえたのであろうし、二つには桃が速く生長する力や多くの実をつける能力に一族の子孫繁栄をあやかろうとしたのであろう。⁽²⁶⁾

この詩から、桃は結婚適齢期のあるいは若い女性を含意するようになった。⁽²⁷⁾

これよりのち、行く春に戯れる美女の姿に桃李を詠みこんだ文学作品は、これまた枚挙に暇がない。例えば、梁の簡文帝(蕭綱。五〇三―五五〇、在位五五〇―五五二)は、「桃は紅く李は白く、朝の妝いの如し」と詠い、毛文錫(十世紀初)は「芙蓉の帯を結ぶを懶り、翡翠の裙を拖くに慵し。正に是れ桃夭柳眉、那ぞ暮雨朝雲(閨房の事)に堪えん」(賛浦子)と、やや際どい。しかし、後に戯曲化されたこともあってもっとも有名なのは、崔護(九世紀)の「城南詩」であろうか、曰く「去年今日 此の門中、人面と桃花と相い紅を映す。人面は知らず 何処にか去る、桃花旧に依りて春風に笑う」と。一方、桃李の花自体がその散りやすさを哀惜されたように、若き女性の隠喩としての桃李もまた、やがて衰え行くべきその容色と重ねられることが多かった。例えば、劉希夷(六五二―六八〇頃)は、「洛陽城東 桃李の花、飛び来り飛び去って誰が家にか落つる。洛陽の女兒 顔色好し、坐ろに落花を見て長く嘆息す。今年花落ちて顔色改まり、明年花開いて復た誰か在る」と(代悲白頭翁)。

さて、桃の持つその旺盛な成長力と繁殖力は、ずっと早く春秋時代から、人々に桃を、邪悪を辟ける霊能をもつ植物と考えさせていた。すなわち『春秋左氏伝』襄公二十九年(前五四四)の条に、楚の国を訪問していた魯の襄公(前五七三―前五四二)が、前年に薨じた楚の康王(前五六〇―前五四五)の葬儀に参加せざるをえなくなったとき、死体の不淨

を祓うために「乃ち巫をして桃茹とうろ（桃の木の柄に葦の穂をつけた簪）を以て先ず殯ひん（かりもがり）を祓はらわし」めたとある。その桃茹というものについて、『周礼』『礼記』などには邪気や不祥を祓う道具として用いられるとあり、その鄭玄じやうげん（二二七—二〇〇）の注に「桃は、鬼き（死んだ人、祖先）の畏るる所なり」という。また『春秋左氏伝』昭公四年（前五三八年）の条には、十二月に切出して氷室に貯蔵しておいた氷を四月に搬出するに当って、「桃弧とうこ・棘矢きよくし（桃を材として作った弓といばらで作った矢）、以て其の災を除く」とある。桃材に特別な除災の力が認められていたことが知られるが、疏にはその理由を「桃は凶より逃とうする所以ゆゑんなり」とし、そもそも桃の字は逃の字と通用せられて「のがれる」「さける」「駆除する」意があったとする。

戦国時代（前四五—前二二）になると、桃の持つ霊力は神話化されて、有名な度朔山どさくざんの蟠桃ばんとうの伝説を生み出した。すなわち『山海経』に、「滄海の中に、度朔の山有り。上に大桃木有り、其の屈蟠くつばんすること三千里、其の枝間の東北を鬼門と曰い、万鬼の出入する所なり。上に二神人有り、一は神荼しんたと曰い、一は鬱壘うつりと曰い、万鬼を閔領するを主つかさどる。悪害の鬼は、執とらうるに葦索いさく（葦で作った縄）を以てし、以て虎に食くらわしむ。是に於いて黄帝こうてい乃ち礼を作り、時を以て之を駆り、大桃人（桃を材木として作った人形）を立て、門戸に神荼・鬱壘と虎とを画き、葦索を懸け、以て凶魅を禦ふせぐ」とある（王充わうぢゆう（二二七—一〇一）『論衡』第二十二卷・訂鬼第六十五所引）。漢代には、臘月の鬼儼おにやういに桃人や神荼・鬱壘の神、葦の索などを用いて疫鬼を追った（蔡邕さいいほ（一三二—一九二）『独断』卷上

「疫鬼」）。近年の中国でも、年末年始に家の門に門神として神荼・鬱壘二神の画像などを張る習慣があるが、それはこの度朔山伝説に遡さかる。⁽²⁸⁾既述したように、「桃夭」の詩において幸福への祈りとして桃が詠われたのにも、六朝時代から道教の中で桃が不老不死の霊薬とされるようになったのにも、その背景にはこのような桃の辟邪の力への信仰が先行してあったのである。

さて、以上のように、中国文化の最古層から桃李にかかわる象徴機能を概観してみても、そこからはなお、桃李の樹下に自ずと蹊を生ずるのはその花の徳の故か実の徳の故かについては結論が得られない。しかし桃李には、これらとはまったく異なった、今一つの含意があった。それを次の章で見よう。

五

前章において、「桃夭」の詩に、春から夏、秋にかけての桃の花・実・葉の盛んな様子が詠みこまれているのを見た。すなわち桃は、中国人の生活の身边にあって春は花、夏は緑陰、秋はその実と、季節感を感じさせてくれる有用な樹木の一であったのである。そのことについて、漢の韓嬰かんえい（前二世紀中葉）の撰した『韓詩外伝』巻七にも、晋の趙鞅ちやうぢやう（前六世紀末—前五世紀初）の言として「夫れ春に桃李を樹うれば、夏は其の下に陰かげるを得、秋は其の実を食くらうを得」とあり、劉向りゅうきやう（前七—前六）『説苑』巻六「復恩」にも同様の記述がある。しかしこれらの逸

話では、桃の有用さは前章までに観察したところとはまったく別のこと
がらの譬喩として用いられるので、『説苑』に従ってその部分を見てみ
よう。

陽虎、罪を衛に得て、北して簡子（趙鞅）に見えて曰く、「今より
以来、復たと人を樹てざるなり」と。簡子曰く、「何ぞや」と。陽虎
対えて曰く、「夫の堂上の人、臣（わたし）の樹つる所の者 半ばを過
ぎたり。朝廷の吏、臣の立つる所の者 亦た半ばを過ぎたり。辺境の
士、臣の立つる所の者 亦た半ばを過ぎたり。今夫の堂上の人、親
から臣を君より却け、朝廷の吏は、親ずから臣を法に危うくし、辺境
の士は、親ずから臣を兵に劫す」と。簡子曰く、「唯だ賢者のみ能
く恩に報ゆるを為す。不肖なる者は能わず。夫れ桃李を樹うる者は、
夏は休息を得、秋は食らうを得。蒺藜（ハマビシ）を樹うるものは、
夏は休息を得ず、秋は其の刺を得。今 子（あなた）の樹えし所の者
は蒺藜なり。桃李に非ざるなり。今より以来、人を扱びて樹えよ。已
に樹えてより之を扱ぶこと母れ」と。

陽虎とは、春秋時代末の魯の国の人、奸臣の三桓との権力闘争に破れ、
衛の国を経て、晋の国に亡命した（前五〇二）。趙鞅は、その頃の晋の実
力者、簡はその諡である。すなわちここでは、陽虎が恩をかけた部下に
裏切られたことを憤り恨んだのに対し、趙鞅が、人材を登用するにはそ
もそもその人柄を事前によく見て、選んでから登用しなければならぬ

のだと、論しているところである。ここに隠喩として取り上げられてい
る桃李は、従って、一面において「不肖なる者」ではない「賢者」、す
なわち優れた人材を、他面において国に推薦して身の立つようにしてや
れば、のちのち「復恩」「報恩」すなわちきちんと恩返しをしてくれる
まっとうな人材を、隠喩している。その隠喩の根柢が、桃李は春に植え
れば、夏には必ず緑陰を提供してくれ、秋には必ず果実を食わしてくれ
る、というところにあるわけである。⁽²⁹⁾ここから、桃李には推挙し登用さ
れた優れた人材という含意を生じた。

なお、「桃夭」の詩からの連想より始まるのであるから、優れた人材
の隠喩としては桃のみでよさそうなものを桃李と言うのには、桃李の熟
語の極めて固い結び付きが推測されるが、人材の意に限って言えば、漢
代の楽府「鷓鴣」に次のようにあることが何らかの関係を持つかもしれ
ない。「桃は露井の上に生じ、李樹は桃の傍らに生ず。虫来りて桃の根
を齧むに、李樹は桃に代りて癩る。樹木すら身を相代るに、兄弟還た
相い忘れんや」と。この歌の作られた年代は趙鞅や陽虎の生きた時代か
ら五〇〇年ほど下るが、桃李はまた兄弟の堅いきずなの象徴でもあった
のである。

時は更に下って唐の則天武后（在位六九〇―七〇五）の時代、狄仁傑
（六三〇―七〇〇）という人々の尊敬を集めた宰相がいた。当時、武后に
よる唐朝篡奪という苛烈な政治の第一線にあって、誣告されて一旦獄に
下ったが、神功元年（六九七）に再び用いられて鸞台侍郎同平章事と
なってより、張柬之・桓彦範・敬暉・姚崇等の人材を推薦して官僚とし

たが、彼らは後にいずれも唐朝中興（七〇五）の中樞に与かり、名臣と讃えられた。後に司馬光（一〇一〇—一〇八六）は、その著『資治通鑑』（一〇八四）卷二〇七の久視元年（七〇〇）、すなわち狄仁傑の歿年の条に、次のような逸話を載せている。

（狄）仁傑、又た嘗て夏官侍郎姚元崇・監察御史曲阿桓彦範・太州刺史敬暉等數十人を薦む。率な名臣となる。或るひと仁傑に謂いて曰く、「天下の桃李、悉く公の門に在り」と。仁傑曰く、「賢を薦むるは国のためにす、私のためにするに非ず」と。

やっかみ半分に、ある人が「いま官について世の中を動かしている優れた人材は、すべて皆あなたの門から出ているのですね」と言ったのに対して、狄仁傑が「いやいや、あれらの賢人を推薦したのは、まったくお国のためにしたことであって、私個人の名声のためにしたことではありません」と答えたというのである。これより桃李満門、桃李門牆、桃李満天下などの成句を生じていくことになるが、これらにいう桃李は、選びとって国に推挙した門人、門生の意である。

他方、唐代は科挙制度が発展した時代であった。科挙試験とは、今日の日本で言う国家公務員試験に当たるが、その合格のための難易度はその比ではなかった。というのは、この試験に合格することは、本人の將來の榮進を約束するに止まらず、一族郎党など、血縁・地縁による縁者たちの決定的な利害にかかわることが多かったからである。その科挙試

験の実施に当たっては、時の博学高識の高官の中から試験官を任命し、これを総責任者として春に都の礼部で中央試験を行い、結果を合格者名簿として発表した。ところで科挙とは、理念の上では、試験官が天下の人材の中から優秀なものを選別して天子に推挙する制度を言う。これを合格者の側からいうと、試験官は、数多の受験者の中から自分を選び採って皇帝に推挙してくれた恩師ということになる。従って、科挙試験の合格者は時の試験官を生涯の師と仰ぐことになった。次に挙げる中唐の詩人・劉禹錫（七七二—八四二）の「宣上人、遠く礼部王侍郎が放榜の後の詩に和すを寄す、因りて繼いで和す」詩の前半の内容は、そのような背景のもとに理解すべきものである。

礼闈新榜動長安、
九百人人走馬看。

一日声名遍天下、

滿城桃李属春官。

礼闈の新榜 長安を動かし、
九百の人人 馬を走らせて看る。
一日 声名 天下に遍く、
城に滿つ桃李 春官に属す。
放榜とは、科挙試験の合格者名簿を張り出すこと、新榜とは新たに張り出された合格者名簿。礼闈とは礼部にある科挙の試験会場。春官とは礼部の雅称であって、ここではこの時の試験官であった王侍郎をさす。従ってその大意は、

礼部に今年の科挙試験の合格者名簿が張り出されたというので、

都の長安じゅうが色めき立っている。全国から集まってきた受験者の中から、米えある合格者が決まったのだ。

何百という多くの人々が馬を駆ってそれを見に行く。

合格者たちはこれからこの国を動かしていく人材なのだから、昨日までは貧乏学生に過ぎなかったけれども、今や一日にして、はやくも天下にその名を知らぬものとしてないありません。

折しも長安城内に春爛漫と咲き誇る桃李の花。合格者たちは、その桃李のように忠実に恩に報いる門生として、今や礼部侍郎である王君に所属することになるのだ。

さて、ここにいう「城に満つ桃李」の含意は、言うまでもなく選んで国に薦めた門人、門生であるが、その桃李そのものの外示義は、その実ではなくその花でなければならない。試験が行われた季節からしてそうでなければならぬし、その生涯の履歴の出発点を科挙試験合格で飾った、すなわち花開いた合格者たちは、そのちにこそ実績を上げる、すなわち実を生らせることによって、王侍郎に恩を報いなければならないのであるから。

このようにして門生が天下に満ちれば、恩師の方も羽振りがよくなるのは当然である。白居易は、「令公の緑野堂に花を種うるに和し奉る」詩に、

緑野堂開占物華、 緑野堂 開いて物華を占む、

路人指道令公家、 路人指して道、令公の家と。

令公桃花満天下、 令公の桃花 天下に満つ、

何用堂前更種花。 何ぞ用いん、堂前更に花を種うるを。

と詠う。緑野堂とは、裴度（七六五―八三九）が晩年に洛陽に営んだ別墅の室号、令公とは中書令の雅称、かつてその地位にあった裴度を指す。従って全体の意は、

緑野堂の門がいま開いて、屋敷内に春爛漫とさき誇るさまざまの花が見える。

路行く人々は、指さしては「あれが中書令の裴度さまのお屋敷だよ」とうわさしあっている。

中書令さまの庭にはもう十分に桃の花がさき満ちているのだから、いまさら母屋の前にさらに花を植えることもあるまいに。

（ちょうどそのように、あなたが推薦して中央の官庁で官僚として活躍している門人は今や五万といふのだから、もうこれ以上門人を推薦する必要もありませんまいに）。

ここでは桃花の語に、一に美しい花をさかせる植物としての桃の花、二に裴度がすでに推挙して天下に満ちている門生の譬喩としての桃の花が、かけことばとして二重の意味をなしているのが分かるであろう。前

近代社会では、地位の高さが富貴をもたらしてもやむを得まいが、「もういいだろうに」という軽い揶揄の気持ちだが、白居易にこの詩を書かせたものであろうか。

しかし、既述した狄仁傑にかかわる『資治通鑑』の片々たる一文が、後々まで文人社会に喧伝されたことからすれば、後の人々が高官や試験官に求められるべき清廉さを、理想的な姿として狄仁傑の中に見いだしていたことは確かなことであろう。既述した「我に投ずるに桃を以てし、之に報ゆるに李を以てす」の句は、毛詩鄭箋（じょうせん）はこれを因果応報の意に取る。ここからは、別の方面に、桃李は贈答のことを、さらには賄賂をも含意するまでに意味がひろがり、桃来李答、桃李之饋などの語を生んだ。狄仁傑にかかわる逸話においても、ある人が「天下の桃李、悉く公の門に在り」と問いかけた裏の含意は、「お弟子さんをいっぱいお役人にして、ままならぬこととはありませんでしょうね、いただきものもいっぱいおありでしょう」という意味であったはずであり、それに対して狄仁傑が、「いやいや、わたしは公正に天下のことをおもんばかってあれらの人達を推挙したのであって、袖の下を貰おうなどは決して決して」と答えた、その公正無私、清廉潔白こそが、この逸話の眼目である。桃李満門のことばには、この高いところざしが託せられているのである。

六

さて、ここに至って初めて、跡見瀧野が自ら花蹊と号した所以、すなわち桃李の実の徳ではなく花の徳こそが樹下に蹊をなさしめるのであるとした理由を、推測し得るところまで来た。それは、第一には「桃李言わざれども、下自ずから蹊を成す」の諺に見られる寡黙の徳に基づきながら、第二には狄仁傑の事蹟を慕って、国家有用の人材を選び取り、それを育成する志であると考えられる。すなわち、その第一は教育者としてのあり方の闡明（せんめい）であり、第二は教育の目的の闡明であって、その二つの思いが、跡見瀧野をして花蹊と号せしめたものであったはずである。

従来、花蹊の号については「桃李言わざれども、下自ずから蹊を成す」の諺に関連してのみ語られることが多かった嫌いを、筆者は感ずる。言い換えれば、跡見花蹊が教育者として自らかくあるべしと考えたもの、すなわち「不言」と、跡見花蹊が教え子たちはかく活躍すべしと考えたもの、すなわち「桃李」とが、区別されていないかのように感じられる。桃李は、決して儒教の説く婦徳に従って忍従に耐えるのみというような存在であったわけではない。桃李は兄弟としての固い絆を保ちながら、自ら短い青春をさき誇り、花ののちには確実に葉と実を提供することによって、天下国家のために有用の人材として機能したのである。

跡見花蹊が教え子にかけた思いを今日に伝えるよすがとして、その古希祝賀会（一九一六）に寄せられた賀詞の二二（藤井瑞枝編『花の下みち』³⁰）を再録して、欄筆することとした。

賀花蹊先生喜寿 鶴堂 石井基威

一樹老桜春苑横 一樹の老桜 春苑に横たわり、

高風依旧盛名栄 高風 旧に依りて 盛名 栄えたり。

瑞雲靨黠謳歌徧 瑞雲靨黠あいたい (雲がたなびく)として 謳歌徧あまねく、

桃李満門佳色明 桃李 門に満ちて 佳色 明らかかなり。

笹川臨風

とこしへの春や桃李の門に満つ

(二〇〇二・一一・五)

注

(1) 筆者は、跡見瀧野がいつから花蹊と号したのか、また正式な命名者がいたのかあるいは自号であるのか等については、正確な知識を持ち合わせていない。

藤井瑞枝編『跡見花蹊先生実伝 花の下みち』(実業之日本社、一九一九

一九九〇復刻)及び『跡見学園年表』(学校法人跡見学園、一九九五)によ

れば、安政三年(一八五六)、跡見瀧野(二七歳)は京都に上って漢学を学

び始めたこと、同五年(一八五八)瀧野(一九歳)は大阪に戻り、父重敬と

中之島に家塾を開いたこと、同六年(一八五九)、瀧野(二〇歳)は父から

家塾を継承したこと、文久二年(一八六二)、瀧野(二三歳)に尊敬が出した書

状の宛名の一人として「花蹊どの」とあること等が知られるから、瀧野のお

およそ二〇歳前後に花蹊と名のり出したものと推測はし得よう。

(2) 伊藤嘉夫「跡見学園女子大学縁起(四)」(『跡見学園女子大学学報』五、一九八二)。

この建物は旧来茶道部の活動の場などとして利用されてきたが、平成十四年度からは茶道・香道など正課の授業の実習の場としても利用されている。

なお、慶応三年(一八六七、瀧野二八歳)二月、跡見家が京都の東洞院二条上るに前年から建築していた新居が完成し、これを不言亭と名づけたということがあった。従って今日の不言亭は、二代目である(註一前掲書)。

(3) 卒業記念としては、モモの木を四本・スモモの木を三本・ヤマモミジ三本、合せて十本の寄贈を受け、ヤマモミジ三本は別途四号館東北に植えた。なお、モモ四本の品種の内訳はヤグチー・キクモモ・ゲンペイシダレニである。

(4) 花径の語の早い用例は、庾肩吾(六世紀前半)に「嶺に向いて花径を分かつ」(『和竹斎詩』)、張正見(六世紀中葉)に「飛ぶこと多くして花径深し」(『梅花落詩』)の句があるなど。杜甫には「暗水は花径に流る」(『夜宴左氏莊』)、また「花径曾て客に縁りて掃わず、蓬門今始めて君が為に開く」(『客至』)等の句がある。

(5) 現代北京音では、径は *ting*、蹊は *xi* または *qi*。

両字の歴代の音については、佐藤昭『中国語語音史——中古音から現代音まで』(白帝社、二〇〇二)等を参照。かつてこの二字の発音が同一であったことはない。

(6) 筆者が知る限り、花蹊の語の唐代における用例は、太宗(在位六二六—六四九)の「禁苑 春暉麗しく、花蹊 綺樹妝う。条を綴る 深浅の色、露を

点ず 参差たる光、云々」の句（『詠桃』）のみであるが、内容から見て桃の花のさくこみちの意であることは明らかである。すなわち、ここでは桃を詠ずるが故に（花径ではなく）花蹊の語が選ばれていると考えてよいであろう。

(7) 班固（三二—九二）『漢書』卷五四「李広・蘇建伝」の贊にも、「李將軍、恂恂として鄙人の如く、口能く辞を出ださず。死するの日に及び、天下の知ると知らざると、皆な為に涕を流す。彼れ其の忠心誠に士大夫に信ぜらるなり。諺に曰く、「桃李言わざれども下に自ずから蹊を成す」と。此の言、小なりと雖も、以て大に喩うべし。云々」という。その内容、および当該の諺を引用する意図は、ほぼ司馬遷と同じい。

(8) このような、己れを語るに能弁を忌んで訥弁を称えることは、すでに孔子の言として『論語』子路篇に「子曰く、豪黷木訥は、仁に近し」とある。これに対して、その正反対の人となりについて、孔子は『論語』学而篇において「子曰く、巧言令色、鮮し 仁」と断じている。

(9) 顔師古（五八一—六四五）もまた、桃李の長所を花と実の両方に求める。すなわち『漢書』の註に、「桃李は其の華実の故を以て、招呼する所有るに非ざれども、而して人争いて帰趣し、来往すること絶えず、其の下自然に徑を成すことを言う。以て人 誠信の心に懐き、故に能く潜かに感ぜしむる所有るに喩うなり」とある。

(10) 「白桃小禽図」団扇軸装（日本／個人蔵）。絹本着色、法量は二六・〇×二四・四センチ。重要文化財に指定されている、古渡りの有名品である。

(11) 唐棣と呼ばれた植物が何であったのかについては諸説があつて、あるいはサイフリボク（采振木）、あるいはユスラウメなどといい、未だ定まらない。

(12) ここに見られる地桃について、地と桃と分解し、地を山桃 *P. davidiana*、桃を桃 *P. persica* とする説と、地桃を一語と見て、かつて榭桃とも呼ばれた山桃のことであるとす二説がある。

(13) 徽宗「桃鳩図」軸。絹本着色、法量は二八・三×二六・〇センチ、もと冊頁であつたものを軸装としたものであろう。「大観丁亥（元年、一一〇七）御筆 天水」の款と、「御書」の印が押捺されている。ほかに、収蔵印として「天山」印が捺されており、足利義満（一三五八—一四〇八）の旧蔵品であつたことが知られる。

(14) 無名氏「桃花図」冊頁。絹本着色、法量は二五・二×二五・四センチ、「歷代集絵」冊の第八幅。楊皇后による「千年伝得種、二月始敷華」の題と「坤卦」「楊姓翰墨」の印が押捺されている。ほかに収蔵印、「交翠軒印」。馬遠筆「倚雲仙杏図」冊頁（台北／国立故宫博物院蔵）とセットものとして製作されたものようであり、作者は馬遠派の宮廷画家であらう。

(15) 呂紀「四季花鳥図」四軸のうち春景。絹本着色、法量は一七六・〇×一〇〇・八センチ。「□衣指揮呂紀写」の款記があり、「明善図書」「四明呂廷振印」の二印が押捺されている。

(16) 劉伶、字は伯倫、沛国の人。竹林七賢の一。性尤も酒を嗜み、常に鹿車に乗り、一壺の酒を携え、死してのちこれを自分とともに墓に埋めるように指事していた。

(17) ここに列挙された植物のうち、楡はシバグリ、淺はヒシ、楨はケンポナシ（玄圃梨）、榛はハシバミ、楂はヤマナシあるいはコボケ、薑はショウガ、桂はニッキという。竹内照夫『礼記 中』（『新釈漢文大系 二一八』、明治書

院、一九七七）・水上静夫『中国古代植物学の研究』（角川書店、一九七七）等を参照。

(18) ここに見られるウリはマクワウリ（中国名は甜瓜）の仲間であろう。

中国の古典に見られる瓜類については、胡道静「中国古代瓜類考」（同氏『中国古代農業博物誌考』（農山漁村文化協会、一九九〇）所収）参照。

(19) 孔穎達は「胆す」の意味として両説を紹介しているが、そのもう一説には、胆は苦であり、桃の実の胆のように苦いものを撰んで棄てることだという。

(20) 中国の古代に、日本の歌垣（嬪）に当る習俗のあったことについては、白川静『詩経』（中央公論社、中公新書、一九七〇）・同『中国古代の民俗学』（講談社、講談社学術文庫、一九八〇）を参照。

(21) ここに詠われている木瓜・木桃・木李について、通常はこれをボケ・モモ・スモモと解するが、異説もある。水上静夫掲書を参照。

(22) 無名氏「桃図」団扇軸装。絹本着色、法量は二七・五×二九・〇センチ。旧伝は北宋の花鳥画家である趙昌の筆という。実際には、南宋画院様式による作品。

(23) 顔輝筆「蝦蟆鉄拐図」二軸（京都／知恩寺蔵）のうち蝦蟆仙人図。絹本着色、法量は一六一・〇×七九・八センチ。この双幅は、伝説的な仙人である、蝦蟆仙と鉄拐仙を画く。蝦蟆仙人は、十世紀頃の人と言う劉海（劉海蟾）を指し、釣り上げた三本足の蟾蜍（ヒキガエル）を自由に操ったという。鉄拐仙は、本名は李凝陽、導神出遊の術を善くす。蓬首垢面、坦腹跛足、状貌奇怪、身に胡蘆を背負い、天下を雲游したという。

作者の顔輝は、字は秋月、廬陵（江西省）の人。宋末元初に活躍した道釈

人物画家、この作品はその代表作。

(24) 趙麒筆「蝦蟆仙人図」軸（東京／根津美術館蔵）。絹本着色、法量は一四三・五×九〇・二釐。「趙麒写」の款記と、「日近清光」印が押捺されている。趙麒という画家の名は、諸々の画史書に見えず、逸伝の画家である。「日近清光」という印文は、一六世紀ごろの明の宮廷画家たちが使用していたものであることから、趙麒もその頃の宮廷画家の一人であり、画風から見て浙江省の人であろうと推測されている。

(25) 桃は、早く生長するのみならず、早く衰えてしまう果樹としても認識されていた。例えば劉基（一三一―一三三五）『多能鄙事』巻七に、「桃は、三年にして実り、五にして盛んに、七にして衰え、十にして死す。六年に至り、刀を以て其の皮を尼き、膠をして出だしむれば、五年を多活すべし」（彭世獎編『中国農業伝統要術集萃』（中国農業出版社、一九九八）所引）と。

(26) 李時珍（一五一―一五九三）『本草綱目』巻一九 果部。

(27) そのことを、中野美代子は次のように要約する。

桃が女性性器ひいては生殖のシンボルリズムを秘めているのは周知の通りであるが、わが桃太郎伝説をひきあいに出すまでもなく、古代の人々は、桃という果物の、その形、そのさわり心地、その味などから豊かな繁殖のシンボルリズムを発見し、無限の生産力をこれに仮託したのであろう。中国最古の詩集である『詩経』に見える「桃夭」詩は、若い娘が結婚し出産するまでを桃にたとえてうたっている。桃がかもしだす無限の生産力のシンボルリズムは、たとえ個体が滅びても種族は繁栄することへの強い願望を生み出すとともに、一方では、個体の生命の永続すなわち長生への願望と結びつく。こうして、

桃は、西王母伝説の中に組み入れられて、長生の仙果としての不動の地位を占めたのだった(『孫悟空の誕生 サルの民話学と「西游记」』玉川大学出版部、一九八〇)。

ただし、桃が女性性器の象徴として扱われたのは、日本における俗説に過ぎないと、水上静夫は力説する(水上静夫前掲書)。

(28) 今日では、神荼・鬱壘の他に、秦叔宝(？一六三八)と尉遲恭(五八五―六五八)の像、鍾馗の像などが門神として用いられている。また大桃人の方はのちに桃板となったが、十世紀の頃からそこに聯語を書き込むようになり、のちには桃板が紙にとって変えられて、今日の春聯となっている。

(29) この説話は、諸本によって登場人物乃至道具立てが異なる。すなわち、韓嬰(前二世紀中葉)の『韓詩外伝』巻七に載るところでは、魏の文侯(前四三七―前三九五)の時、子質と簡主のこととなっており、『韓非子』外儲説左下に載るところでは、桃李と蒺藜が橘柚と枳棘(からたちやいばら)となっている。

(30) (1) 前掲書。



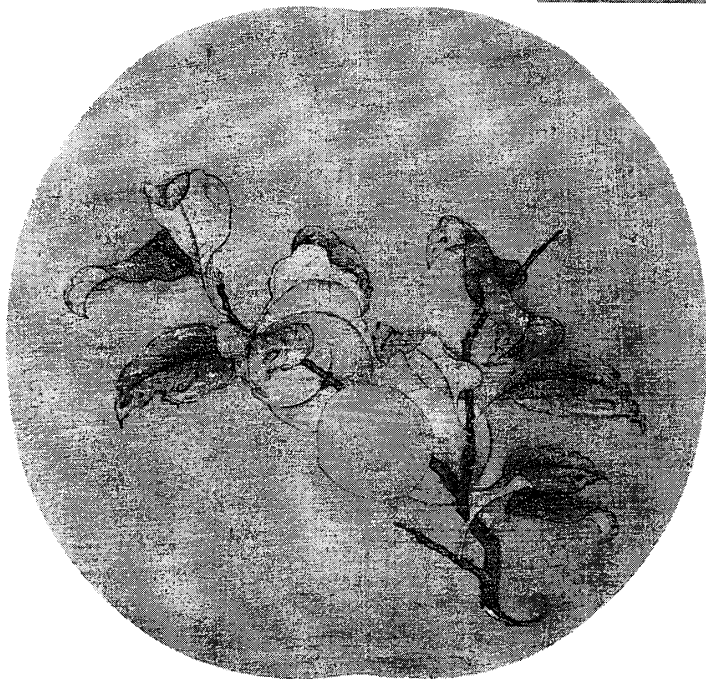
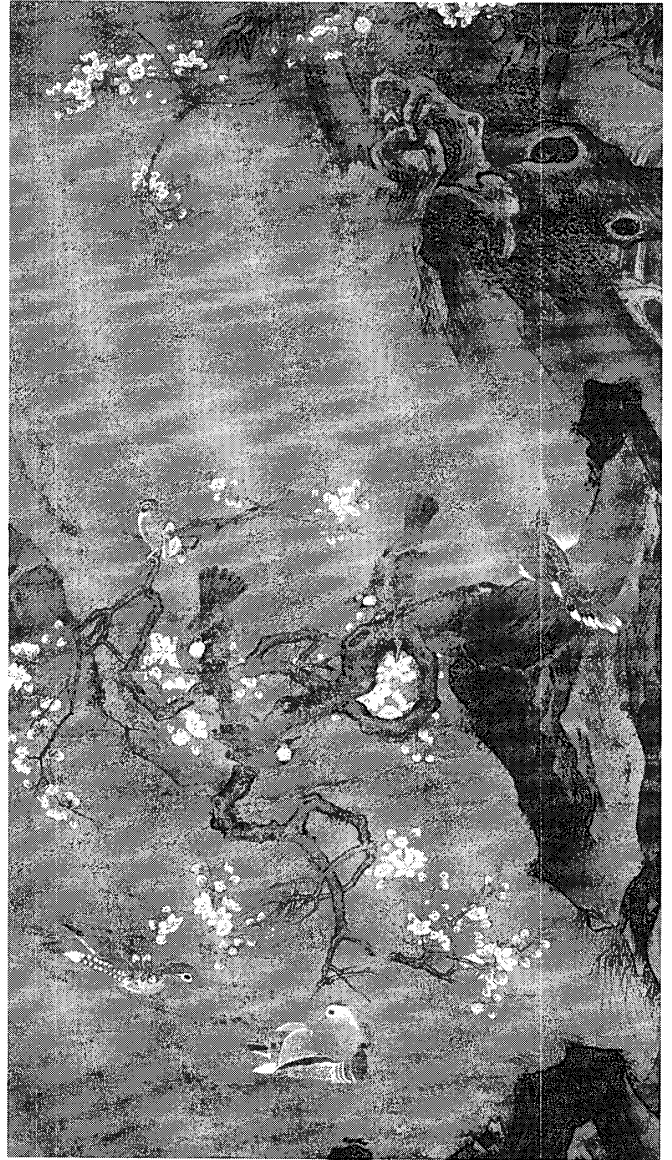
挿図一 南宋・作者不詳「白桃小禽図」軸(日本・個人蔵)

插图二 北宋·徽宗「桃鳩图」轴（日本·个人藏）



插图三 南宋·作者不詳「桃花图」册页（台北·国立故宫博物院藏）

插图四 明・吕纪「四季花鳥図」四幅対より春景（東京国立博物館蔵）



插图五 南宋・作者不詳「桃図」軸（日本・個人蔵）

插图六 元・顔輝「蝦蟇鉄拐図」双幅より蝦蟇仙人（京都・知恩寺蔵）



插图七 明・趙麒「蝦蟇仙人図」軸（東京・根津美術館蔵）